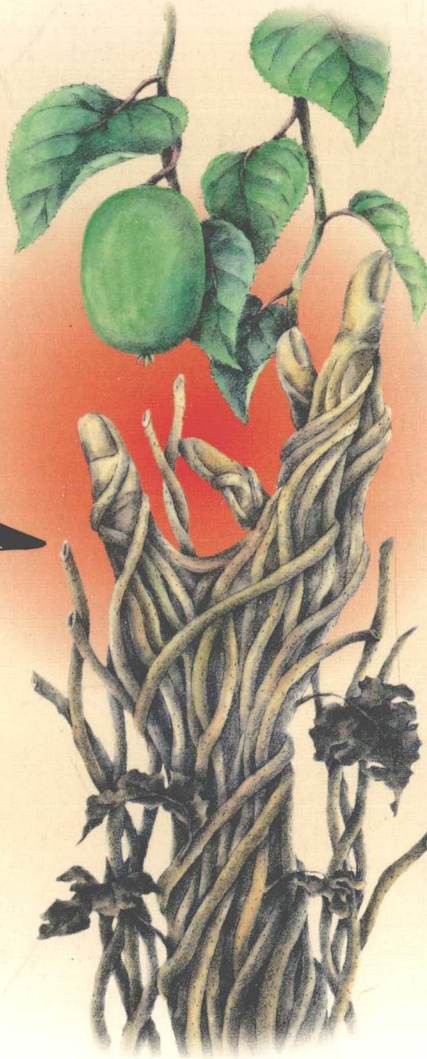
葛橋

かずらばし



坂東眞砂子

葛橋

かずらばし

坂東眞砂子

角川書店

〈初出誌〉
一本樒……「小説王」　94年3月号
恵比須……「別冊文春」97年春号
葛　橋……「小説王」　95年3月号（全面改稿）

葛橋（かずらばし）

平成十一年一月三十一日　初版発行
平成十一年七月三十一日　三版発行

著　者――坂東眞砂子
発行者――角川歴彦
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三-三
〒一〇二-八一七七
振替〇〇一三〇-九-一九五二〇八
電話／営業部〇三-三二三八-八五二一
編集部〇三-三二三八-八四五一

印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本は小社営業部受注センター読者係宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
©Masako Bando 1999　Printed in Japan
ISBN4-04-873143-2　C0093

葛橋

かずらばし

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

【目次】

一本樒（いっぽんしきみ） 5
恵比須（えびす） 107
葛橋（かずらばし） 189

装画・口絵・中扉イラスト……廣川沙映子
装幀……角川書店装幀室

一本榕

一

一本榕が揺れている。

台所の窓辺に置かれたコップの中で、隙間風に吹かれて小さく身を震わせている。

天に向かって指を広げる葉は濃い緑。電灯に照らされてつやつやと輝き、仄かな芳香を撒きちらす。甘いその匂いを嗅ぎながら、私は今日も流しに立つ。洗い桶に入れた食器をスポンジでこする。茶碗が心地よさそうな声をあげる。藍色の麦藁手の模様が白い泡に包まれていく。

暗い曇り硝子の窓の外はもう秋だ。冷たい風が山の木々を掻き乱す。森が地鳴りのような音をたてて騒いでいる。今夜は風が強い。せっかく熟した木の実が落ちなければいいのだけど……。

「なに、抜かすんや、この女っ」
突然、響いた怒声に手が震え、夫の茶碗が洗い桶に滑り落ちた。水飛沫が顔に飛び、私は現実に引き戻された。
背後の茶の間を振り向くと、僅かに開いた障子の奥に沈黙が張りつめている。
話し合いがこじれたのだろうか。不安が胸に湧いた時、夫の声が聞こえた。
「まあまあ、坂上さん。そんなにかっかしはったら、話もでけしまへんやろ」
そのおっとりした口調に、私は肩の力を抜く。
「お義兄さんのいわはる通りや。あんたがそんなに短気やさかい、私も家を出るしかなかってんで」
妹の菜穂が口を挟み、坂上の舌打ちが続いた。
私は前掛けで手を拭いて、障子の間からそっと隣室を覗きこんだ。
六畳の和室に置かれた炬燵を囲んで、三人の人間が座っていた。縁側を背にして、あぐらをかいているのは坂上勇だ。青ざめた顔で片目をぴくぴくと震わせ、向かいに座る妹を睨みつけている。菜穂は炬燵蒲団の上に膝小僧を出して、横座りをしていた。細い体のわりにはぽってりと肉のついた尻の線が、桃色のニットワンピースの下で浮きたっている。そんな二人の様子を見守りながら、トレーナー姿の夫の浩一郎が筋肉質の体を前後に揺らしていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

炬燵の上には、食後のために用意した湯飲み茶碗と羊羹を入れた菓子盆が置かれている。それが、この緊張した部屋の空気とはいかにもちぐはぐだ。

坂上が、茶色の革のジャンパーのポケットからきれいな水色の箱を取りだした。普通の煙草の箱よりもひとまわり大きく、外国の煙草らしい。一本、抜きだすと、眉間に皺を寄せて銀のライターで火をつけた。パーマをかけた髪が額にかかり、彫りの深い顔に影が落ちた。

この男は危険だ。

最初に坂上を見た時、感じたことが、再び頭に閃いた。

――お姉ちゃん、私の今度の彼、見たってや。

そう菜穂にいわれたのは、一年前のこと。気乗り薄な私を、妹は強引に大阪のミナミにあるしゃれたバーに連れていった。坂上は、そこでバーテンとして働いていた。俳優にでもなれそうな端整な顔をしているために、彼を目当てに来る女性客も多いのだと、菜穂は自慢たらしく告げた。しかし私は、一目見た時から坂上が気に食わなかった。吸いこまれそうな黒い瞳の奥で、こすからい色が見え隠れしていた。

あんまし勧めへんなぁ、と呟いた私を、妹は怒って見返した。

――やっぱしお姉ちゃんも、お父さんやお母さんと一緒やな。私の選んだ人に反対しかせえへん。

やがて菜穂は坂上との同棲をはじめたが、長い間、電話のひとつもよこさなかった。私たちは、たまに葉書で短い音信を伝え合うだけになってしまった。それが三日前、バッグ一個持って、菜穂が突然、この家に転がりこんできた。坂上に殴られたらしく、顔が腫れあがっていた。

――もう、あかん。あんな人、もう辛抱でけへん。私、別れたる。

泣きながらぶちまける妹を、やっとあの男と別れる気になったかと、私は喜んで迎え入れた。しかし、まさか坂上が菜穂の残した葉書を頼りに、この家にまで押しかけてくるとは思いもよらなかった。

夕食を終えて膳も片づけ、お茶の用意をしていた時、「菜穂ーっ、菜穂はおるかぁっ」と、いきなり坂上が縁側から家に上がりこんできた。そして妹を見つけると、無理やり連れだそうとした。夫が仲に入って話し合いをはじめたからよかったようなものの、放っておいたら何をしでかすかわからない剣幕だった。

だから坂上はやめろ、といったのに。

障子の陰に隠れたまま、私は心の内で妹をなじった。

坂上は自分を落ち着かせようとするようにしきりに白い煙を吐きだすと、菜穂に向かって顎をしゃくりあげた。

「ほな、ゆうてみぃ。俺のどこが嫌なんや」

菜穂はマニキュアをした指で長い髪をいじりながら、つっけんどんに答えた。
「どこもかもや。私の稼いだ金も、人から借りた金も、皆、マージャンや競馬に使いまわってからに。この頃は、サラ金からも借りてるやろ。家におったら借金の催促の電話ばっかりで、気が変になりそうや。もう、あんたなんかこりごりや」
坂上は煙草を、夫の湯飲み茶碗に放りなげた。煙草は灰色の煙をくゆらせて、茶の中に沈んだ。
「おまえが新しい服が欲しいだの、旅行に行きたいだのせっつくさかい、なんとか金を作る算段をしてんやないか」
「やくざから借金してまで、金作ってくれとはゆうてへんわ」
坂上はあからさまに顔を歪めた。
「ほな俺が賭事もやめて、真面目に仕事だけするようになったら、ええゆうんか」
菜穂はぱっと顔をあげた。大きな瞳が、きらりと光った。
「今さら遅いわ。その気があったなら、私が文句ゆうた時にそうしてくれたらよかったんや。せやのに、私を殴っただけやってんか。もうあんたには、ほとほと愛想が尽きたわ」
「他に男ができたんやろ」
坂上が歯の間から言葉を押しだした。菜穂は薄い唇を曲げて笑った。
「あんたかて、他に女、作ってたやない」

「あれは、ちょっと遊んだだけや」
「ほな、私が遊んだらあかんゆうの」
「やっぱり他の男と遊んだんかっ」
坂上は腰を浮かせて、炬燵越しに菜穂につかみかかろうとした。横から夫が手を伸ばして、坂上の腕を押さえた。
「坂上さん、暴力はあきまへんで」
「うるさいなぁ、おっさん」
坂上は浩一郎を睨みつけた。しかし、つかまれた腕が痛いのだろう。顔をしかめて、また腰を下ろした。
小柄な夫だが、二十代前半はずっと建築現場で働いていたので、体力はある。啖呵は立派だが、痩せてひょろひょろした坂上なぞ簡単に組み伏せることができるだろう。
私は少し気が楽になって、流しの前に戻り、また水仕事にとりかかった。洗い桶の中から、白い泡にまみれた夫の茶碗を拾いあげる。高校時代の友人から、結婚祝いにもらった夫婦茶碗の一方だ。水道の蛇口をひねって、洗剤の泡を湯で流す。ぬるぬるした陶器の肌が滑らかになってくる。洗いたての茶碗から白い湯気が昇る。
私は、次に桶の中から自分の茶碗を探りだす。夫のものより少し小ぶりの茶碗を丁寧にスポンジでこする。

「ほな、おまえは、男ができたさかい俺と別れる、ゆうんやな」
「違うわ。あんたみたいなやくざな男とは、もうやってけへん、ゆうてんのや」
坂上と菜穂の言い合いが続いている。
私は耳を塞ぎたくなる。自分と夫の間では決して起こらない類の諍いだった。結婚して四年、もちろん些細な口喧嘩はあった。たいてい何事も鷹揚に受け流す浩一郎だが、自分が馬鹿にされたと感じると、猛烈に怒りだす。一度、気軽な気持ちで「なんも、わかってへんな」と呟いた時、いきなり頬を殴られた。以来、私は夫に対する言葉遣いに注意するようになった。夫婦関係とは、そうやってお互いの気遣いを積みあげていくことで築かれていくものだと思う。
だが、菜穂も坂上も、そんな思いやりなんか、とうにどこかに棄ててしまったらしい。二人は醜い言い争いを続けている。
「俺がやくざな男やったら、おまえはなんや。すぐに店の客に色目を使ってからに」
「客商売やさかい、しょうがないやろ。それに、他の男とどうしようと、もう私はあんたの女やあらへん。関係ないわ」
「ほな、やっぱり男がおるんやなっ」
炬燵が揺れる音がした。足音が響いて、菜穂の小さな悲鳴があがった。
「坂上さん。菜穂ちゃんに手ぇ出したら、警察を呼ぶで」

夫の声が飛んだ。
「呼びたけりゃ、呼びゃあええわ。その代わりにな、あんた、自分がどうなるかわからへんで。俺には、ミナミの怖い人がぎょうさんついてんやで」
菜穂が甲高い声で笑った。
「下っ端のくせに、えらそうなことゆうて」
「なんやとっ」
器の割れる鋭い音が響いた。私はぎょっとして水道の蛇口を止めた。
「坂上さんっ、気ぃ鎮めてください」
夫が叫ぶ。障子ががらりと開いて、妹が割れた湯飲み茶碗を持って出てきた。
「お姉ちゃん、布巾(ふきん)、布巾」
私は急いで流しの縁に置いた布巾を手渡した。
茶碗の破片をビニール袋に入れながら大丈夫かと聞くと、妹はこわばった顔で頷(うなず)いて、背後を振り返った。茶の間では、夫が坂上の肩を押さえて再び座らせているところだった。坂上の顔は赤くなり、目は血走っていた。肩で息をしているのがわかる。
菜穂は忌ま忌ましそうに呟いた。
「ほんま、しつこい男やわ」
「あんたもわざわざ坂上さんを怒らせるようなこと、いわんかったらええのに」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com